

1986年11月

第3部 南部

1日 ゴールデンゲートブリッジ

ユナイテッド航空16:00発ロスアンジェルス行は、出発前日の夕方欠航と決定。おかげでサンフランシスコ経由ロスアンジェルスという乗り継ぎが必要になり、ロスアンジェルス着が3時間おくれとなる。3時間は「たかが」ではない。私にしてみると、ハリウッド、ユニバーサルスタジオの見学予定が、ハリウッドしか見られないこととなった。ユナイテッド航空を選んだら、もうアメリカ人になるしかない。ユナイテッド航空の機内はさすが、外国人が多い。機内に並んで座った3人の様子を見てみよう。窓側は、小柄で陽気でかわいいヤンキーねえさん、通路側は米空軍のマッスル兄さん。「マッスルとフィットネス」という筋肉マンと筋肉ウーマンの雑誌を読んでいる。2人のアメリカ人にはさまれた男は言語障害のある東洋人。役者がそろったところで様子を覗いてみよう。この3人、ヤンキー娘の「自由に話をしましょう」という合図で話しだす。マッスル兄さんはもっぱら軍での話をしている。「空軍のくせに移動はたいていトラックで、目的地へついたところには、もう真っ黒さ」なんて話。ヤンキー娘の興味は芸能界、聞いたことない名前やテレビ番組名をやつぎばやに出すが東洋人にはチンプンカンプン。この東洋人だって映画「カサブランカ」のイングリット・バーグマンに思いを寄せているのであるがさすがに時代がかっていて話にならない。東洋人は話が十分わかっているようには見えないが、ヤンキー娘がしばしば腕にしがみつくので楽しそうで、「白人の体温は日本人より高いな」等という東洋的思ゆいの世界に入っているように思えた。ヤンキー娘は日本に来ている海軍の夫にフロリダから会いにきた風に見える。カリフォルニア大学バークレー校を知らなかったり、日本に来たのに京都を知らなかったりとあまり教養が有るようにはみえないが、「かわいくて陽気ならば全て許される」と東洋人は思っているようにみえた。

私は前回アメリカへ行った時の飛行機中の苦い経験があるので、酒は断ち、8時間の退屈は覚悟であったが、不思議に退屈はなかった。もちろん酒も飲まないのが気分が悪くなることもなかった。私の席は幸か不幸かエコノミークラスで、酒は有料なので飲み過ぎる人はいない。私の前のビジネスクラスの人がトイレへ来るとき1人倒れた。バカメと思っていると10分もしないうちに又1人そして又10分後に又1人。卑しい心を出してただ酒を浴びるとあのようなになるのである。スチュワーデスもあきれて「もう酒は飲ませないわ」等といていたが、出発前に「飛行中は気圧が低いのでアルコールのまわりが早いから、飲み過ぎないように」との注意をした方が親切である。さすがに私は紳士、3年前の経験が無にせず、国際人に成長したようだ。ハッハハハ。

この様なエンターテイメントを楽しんだりウトウトしているうちに空の白みはじめる。夜が明けだして一時間ぐらいたったところ大陸が見えた。4年前はじめてアメリカ大陸を見た時の感動がよみがえる。あの時は、夢にまで見たアメリカに着いた喜びと、これからの不安とで複雑な胸騒ぎを感じた。そして「アメリカ大陸は赤い

な」、というのが最初の印象だったのを覚えている。今回は大陸の土が赤くない、海洋線は何となくカーメルに似ているなと思ってながめっていると、海面すれすれに長い橋が見え、その先に白いテントのような建物が見える。あれはレッドウッドシティーへ行く時に渡る橋だ。” I used to drive there”（よくドライブしたところだ）、体中に電気が走る。でもまずい。これは南からサンフランシスコ空港へ向かっている。「へたをすると私の恋人ゴールデンゲートブリッジが見えない」と思っているうちに、案の定サンフランシスコさえ見えず飛行機は着陸ムー。

サンフランシスコ到着がおくれたのでサンフランシスコで泊まろうかと思ったが11:30の飛行機でロスアンジェルスに向かう。サンフランシスコからロスアンジェルスへは南向きなのでゴールデンゲートブリッジは見えないと思ってあきらめていたら何とゴールデンゲートブリッジが見えた。“Oh my Girl”もちろん彼女は私に手をふっていたことはいうまでもない。” See you again”。飛行機は低空を飛ぶ。以前、サンフランシスコからロスアンジェルスへの飛行機のコマーシャルをテレビでやっていたが、あのおりである。海岸線に沿い静かに静かに。美しい。

ロスアンジェルスでは先ず荷物をホリディインへおろしハリウッドへ。ハリウッドは映画館街といったところでたいしたことはない。裏通りのヤシの並木は珍しいが。時すでに4時、日は西に傾きゴロツキ達がゴロゴロしだして気持ちが悪い。チャイニーズシャッターだけを見てバスで宿に帰り寝る。

2日 バーボン通り

ロスアンジェルス発10:30、ニューオリンズ着4:30。ニューオリンズはミシシッピ川の三角洲にあり、飛行機から見ると木が水の中からはえている。一寸フロリダ（行ったことはないが）の湿地帯を思わせる。気温は低いが湿度が高く日本人には異様な感じである。ニューオリンズは高層オフィス街を中心に形式されている。オフィス街のミシシッピ側は、昔の南部の繁華街を意図的に残していると思われる歴史街で、レンガづくりの建物や、ベランダ付き二階建の建物が南部の雰囲気を作り出す。オフィス地区の北西には世界最大の室内競技場スーパードームや住宅街がある。

フレンチクオータは歴史街の中心である。ホテルはフレンチクオータにとった。日が沈むころからトランペットの音が聞こえ出し、これにさそわれて街にくり出す。フレンチクオータの中心はバーボン通りである。幅20m位、長さの200m位の左右におみやげものや、音楽バー店が並ぶ。バーでは音楽が流れているが、ジャズは少なくロックが主である。通りの人は多いが店内の客は少ない。ストリップも有りドアを開けたり閉めたりして中をチラチラ見せているが、皆覗くだけで中に入らない。男のヌードも有りホモ用かと思ったら女性用である。女性が陽気にひやかしていくが入る人はいない。おみやげもの屋の主演は悲しい顔をピエロのお面。これがどうニューオリンズと関係が有るのかわからない。どれにもニューオリンズと書いてないし、台湾製となれば買う理由もない。バーボン通りのはずれにプリザベーションホールといって、市が昔のデキシールランドジャズを昔のままにやっているホールが有るので、そこに入る。ホール内は大半が立席で、100人位でいっぱいになる大きさである。室内は満席で立錐の余地もない。このホールは昔のままで大変きたないが、本物を見ているという感動がある。ここで生まれたデキシールランドジ

ャズはすばらしい。しかも2ドルである。幸せだ。アメリカ人も本物指向があるようだ。フレンチクオータではこのホールだけが繁盛していた。そしてみんな乗っている。リズムが体にしみついているといった感じである。みんなで演奏者を元気付ける。みんなで盛り上げ、みんなでのって楽しむ技術にかけてアメリカ人は天下一である。軽薄というには少しもったいない。

アメリカ人は深慮遠望にかけるという一席。

昨日私の飛行機が飛ばなくなったのは乗客が少なかったので2台を1台に集めたのである。これで燃料が浮いたと考えているのであろうがこれ浅はかである。限られた時間でアメリカを見ようとしている人はこの遅れによって、重要な部分を見失う。同機に乗っていたあるグループはロスアンジェルス―サンフランシスコの順にアメリカを見る予定だったが、欠航のためサンフランシスコからロスアンジェルスへ行き又次の日サンフランシスコとんぼ帰りであった。私だってもうユナイテッド航空には乗らないであろう。燃料節約で客を失うことになるのを知らないらしい。アメリカ人は物を買うときもそうである。新らしく面白そうな機能が付いていればどこの会社の物でも買う。日本人はまず会社を見て機能が低くても安全な方を買う。私は米社の面白そうな計算機を買ったことがあるが、完成度が低くて、使えるようになるまで長期間かかった。その間会社は梨のつぶてで何も返答を示されなかったことがあり、安全の方を重んじるようにしている。アメリカ人は一度売ったらそのままだったりするので注意がいる。アメリカ人はそれでも新らしい物に飛び付く。この国民性はいまだに理解できない。これが何に起因するものなのか？。もっともこの精神が、アメリカで次々に新らしいアイデアをうみ出す源になっていることは確かである。開拓精神とも違うような気がするのだが。いいアイデアが合ったらアメリカへ売れ。

3日 スカーレット・オハラ

南部への興味の一つは「風と共に去りぬ」による。もちろん舞台はアトランタであるが日本から見ればそう遠くない。「風と共に去りぬ」は米映画の最高傑作である。画面の一カット―カットが美しい―まいの絵画である。ヴィヴィアン・リーの演技もすばらしく彼女の体からエネルギーがほとばしり彼女のまわりが光輝いて見える。人間の熱情の最も精製されたもの。また脇役の黒人の演技が光る。あれが戦前のものというから驚くほかはない。スカーレット・オハラの家、そしてあの情熱を見られるだろうか。そしてトムソーヤのミシシッピー、蒸気船。

今日は昼間のフレンチクオータを歩き川岸へ向う。ニューオリンズの建物はみな2階にベランダが有り独特の雰囲気をかもしだす。フレンチクオータは当時売春宿であつたろうと思われるのだが、そうはどの本にも書いてない。でもたぶんベルの店はこんな所だったに違いない。川岸に行くと綿商社と思われる古くて立派な建物がある。英語を読んでもとビール醸造会社になってしまうが、これは綿商社の建物でなければならぬ。昔は綿商社だったに違いない。そしてこのあたりで奴隷が売買されていたに違いない。この綿商社の前からトムソーヤの蒸気遊覧船が出る。2時間コースと5時間コースがあり2時間コースに乗る。2時間有れば相当の距離行くと考えたがせいぜい4～5kmを行って帰るだけである。

ミシシッピーもこの辺に来ると多くの支流に分かれているせいか、巾はせいぜい2

～300mである。

午後欲望という名の電車に乗る。こう書くと文学的素養のない人は「何かえらく乗りごちのよいもの」にでも乗ったのではないかと考えられるかもしれないが、知る人ぞ知る、私も米国行き直前まで知らなかったテネシー・ウィリアムズの劇である。この脚本はあまり感じるものがないが、いずれにせよ欲望という名の電車である。この欲望はdesireの訳であるが感心しない。desireにはもう少し希望とか明るいイメージがあるように思うのだが日本版は欲望である。この電車、要するに市電であるが、まさに欲望といった感じで、美しい部分が消えて醜い欲望だけ残った風にも見える。しかし当時は最新のものだったはずで明るいイメージだったのではなかったかと思う。

この電車は南部の高級住宅地を走り、そこには南部特有の家が有るというので乗ったわけである。この電車はどんどん高級住宅地の中を進むのだが乗って来るのは

がはじまる。あまり長く続くので運転手は車をストップさせて後の方へ行く。前の方の白人はするすると音もなく下りて行く。どうやら後の方で暴力行為が行われているらしい。運転手は無線機をもっていて警察に連絡している。私もおりたほうが

の力になった。

そうだ、私のニューオリンズ滞在は今日一日。スカーレット・オハラを見なければいけない。「車内には黒いスカーレットしかいないな」と思いつつ住宅地の方を見ると大学生ぐらいの白人が歩いている。あれはスカーレットに違いない。歩き方がどことなく気が強そうだ。あれに違いない。顔は見えないが顔は知っている。スカーレットでなくてははいけない。何しろ時間がないのだから。「風と共に去りぬ」の中で一つの疑問だったのはスカーレットの家の中は大きくて立派なのに外から見ると巾が以外と狭いという点である。この住宅地の家はまさにスカーレットの家の外観である。だが内部はスカーレットの家のように立派なのか、スカーレットの家がこれよりもっと大きいのか疑問が残った。

夜再びプリザベーションホールへ。

4日 外人

ニューオリンズ発9.50ダラス着10.50。今日からダラスで学会の本会議が始まる。

アメリカに来ると、いろいろな人種に出会う。ロスアンジェルスのホテルの労働者はほとんどがメキシコ人だった。メキシコ人の英語はスペイン語なまりが強くてわかりにくい。学会ではインド系が以外に多かった。小雨ふるダラス空港のバス待ち場で知り合い、ホテルまでタクシーを合乗りしたのもインド人であった。インド系の人には舌を竹の様にカチカチさせながら英語を話す。映画「ショートサーキット」のインド人はその代表である。thをθと発音しないでtと発音しているのではないかとされる。

南部は黒人が多い。ホテルのレストランはほとんど黒人で、夜レストラン内が暗

民（奴隷として来たのではない）である。ダラス空港からのタクシーの運転手はナ

イジェリアからの人であったし、ダラスの売店のおばさんはエチオピア人であった。私の国籍を聞くと、「××を知っているだろう」と言う。知らないというわけじゃない。そんな顔をして「××アベベだよ？」と言う。” Oh! I know”。「彼はマラソンの英雄だ」と言ったらえらくよろこんでいた。会議場のカフェテリアのサンドイッチ係りの人もエチオピア人であった。このサンドイッチのスイスチーズが大変おいしいので、「あなたのサンドイッチは大変おいしい」と言ったら肉を倍ぐらいサービスしてくれたが多過ぎて食べきれなかった。

どこへ行っても日本人はいる。昨日の遊覧船にだって5人も乗っていた。アメリカにいと自分は白人のつもりになっているので白人から見た東洋人のイメージがわかる。ぬけめがないとか、ずるがしこいという感じがする。これは日本人、韓国人、中国人についていえることである。体つきが小さいためにちょこちょこ動き、動きに優雅さが無い。すぐ走る、短足、細目（フィリップ殿下いわく）、デッ歯、ああもういや！。往きの飛行機で会ったアメリカ人は、「日本人は正直なので尊敬している、韓国人は、フィリピン人は」といっていた。「わたしもアメリカ人大好きである」と言っておいた。

白人になった気でも英語が通じないのですぐ我にかえる。本当にこの旅行は漫画である。往きの飛行機で夕食にスチュワーデスが「チキンライスステーキ？」と言うので「Ok! チキンライスステーキ」と言ったら、「どちらだ？」と言う。チキンライスかステーキを選ぶのであった。それなら「チキンライス、ステーキライス」と聞けばよいのにと思っていると、ステーキにはライスが付いていなかった。ホテルのレストランでは、ウェイトレスがオレンジジュースを持ってきて「ワットアイズカミング」と言う。「わからない」と言うので「ok」と言って行ってしまった。何のことかなと思っているとやがて水が来た。「ウォーター イズ カミング」と言え！。やはりレストランでローストビーフサンドイッチを注文すると、「ホット？」と聞く。ローストビーフが通じていないのかと思ってローストビーフと言い直すと又「ホット」と聞く、あたたかいローストビーフかと思って「ok」と言うと、しばらくしてコッペパンのでかいやつにローストビーフをはさんで持って来た。「こんなでかいの食えるか」と思いつつ何でこんなのを食わなければならぬのかとくちくち考える。そうだとホットとはホットドックのパンという意味なのだ。ムー。

信じられないくらい私の言うことが通じない。こんな状態で一年住んでいたのかな？。必ず言い直しが必要となる。相手の言うことはたいてい後半分ぐらいがわからない。もういやになっていると何も違ってないはずなのに5日目から不思議と私の言うことが通じるようになった。ただヒヤリングの方は帰りでも文頭からは2/3位しかわからなかった。

「だいぶ話しが通じるようになった」なんて思ったころ落とし穴は待っている。帰りダラスからロスアンジェルスへ飛ぶときデルタ航空の改札の人が、間違えてロスアンジェルスー東京間の切符を取ってしまったことが東京行きに乗ろうとした時わかる。時間は無い。ユナイテッドの窓口の人は日本人の顔をしていても日本語は通じない。ユナイテッド航空の人はデルタ航空で証明書をもらってこいと言う。デルタではもちろん日本語は使えないし、なかなか証明書を出してくれない。時間は無くなる。デルタでやっと証明書をもらい又ユナイテッドへ。ユナイテッドが又この証明書のチェックに時間をかける。日航ならこんな時デルタまで行かせないだろうし日本語が使えれば楽なのにとホゾを噛む。やっとOKとなり飛行機に乗り込む列

にならぶ。私の切符は皆と違うので又入口で聞かれるなと思う。私のまわりは日本人だし、少しかっこよく説明しなくてはなどと思いつつ英作文。入口の人は白人でけげんそうな顔をしたのでさっそく流暢な(?) 英語で説明をはじめたら「けっこうです。どうぞ」と流暢な日本語をしゃべった。

5日 ダラス

南部は砂漠地帯と思っていたら大まちがい、南部は豊かである。ダラスに入るには、ダラス・フォートワース空港から入るのが普通である。これはダラスとフォートワースという2つの都市の間に有る。ダラスは石油の発見で豊かになり市が生まれ変わった。また最近では半導体産業の中心になりつつある。

5日午後バスでダラスに向う。ダウントウンのはずれのバスデューポでグレイハウンドの市内観光に乗ろうと思ったが、グレイハウンドにはそんなのはない。それはたぶん、グレイラインの間違いだと言われて、中継地であるホリデーインに行ったら冬の間は夏より15分早く1時15分発だと言われ10分遅れで乗れず、あとは自力で観光。ダウントウンには約20本の高層ビルとリユニオンタワーという塔が有る。ダウントウンは小さなところで、主に銀行ビルが目につく。銀行以外の会社はダウントウンを中心に4Kmぐらいの円周上に有るようである。ダウントウンの中心はケネディーメモリアルである。ここがケネディーの撃たれた所かと思うと実際の場所はそこから180m離れた所であると書いてある。ケネディー暗殺の記録が生々しいのは初めての日米宇宙中継の最初に飛び込んで来たニュースだったからである。撃たれた様子が何度も放送された。

私の印象では人がきあふれた大歓迎のパレードの最中、十字路を曲がろうとしたところで打たれたように記憶していたが、現場は、そのようには見えない。フリーウェイの出口のようでさほど広い場所でもない、人があふれるような広い所でもないようにみえる。こんなちっぽけな町で殺されるとはケネディも予想しなかったであろう。

ケネディー・メモリアルとならんで、ダラスを初めて開いた人の家というのが残されている。よく昔の西部劇で、簡単に家を建てるのが不思議であった。この家からその理由は分かる。高さはせいぜい2mぐらいで厚板を積み上げ木と木の間をドロでうめたものである。これなら私でも木さえあれば2日でできる。こんな小さな家からダラスが始まる。まさに大草原の小さな家である。近くのリユニオンタワーにおのぼりさんになって昇るとダラスが一望できる。このタワーは鉛筆の上にテニスボールを乗せたような形である。ボールの直径は50mぐらいであろうか。このボールのまわりに無数の電球がついていて夜はこの電球がついたり消えたりする。

この球は4Kmも離れたホテルの窓からよく見え、最初は花火かと思った。まさに電気の花火で様々に形を変える光は美しいユニークである。エッフェル塔のものまね国辱東京タワーとは大違いである。帰りはバスが分からないのでタクシーにのったが、タクシーの運転手は学会の行われてるビルは嫌いだと言う。あれは19世紀のイギリスのビクトリア朝の建物のまねで気にいらぬ。独自のデザインで建てるべきであるという主張であった。どこの国でも屈辱物はあるらしい。

ダラス市内は都市であるが郊外は田舎で牛が草を噛む、まさにテキサスである。

テキサスというアラモを思い出さなくてははいけない。元々テキサスはメキシコ

の領地であったが、メキシコの圧政から独立すべく戦いとなった。アラモの砦はサンアントニオにありメキシコの攻撃を遅らせてアメリカ軍の体制を立て直すための時間かせぎの役割をになっていた。もちろんこの戦いでテキサス軍は全滅し、この話しが名画として残っている。この映画は涙なしには見られない。戦いの前、家族を安全な所に送り出すシーン、美しくかなしいメロディーの中を静かに去って行く家族の姿は胸をしめつける。もっともメキシコ人の目から見るとアメリカ人はメキシコからテキサスを取ったとってアメリカに良い印象を持っていないようである。

6日 フォートワース

6日は発表である。数年前、初めての国際会議の時は緊張したが今日はそれほどでもない。十分練習はしてあるし、日本セッションで発表者4人と議長が日本人なので気楽である。朝、日本セッションのまとめ役T大の先生を囲んでの朝食会があった。この人は大変教え好きの人で先月日本で練習会のときに博識をご披露してくれ、食事のマナー、スープの飲み方まで教えて下さった。ただこの方はスープの飲み方は良いが、物を噛むとき口を閉じて噛むことを御存知ないのが残念であった。

発表は最終日で人が集まらないのではないかと心配したが、結構な人気であった。私の前の2人の発表はつまらぬもので何も質問がないという幸せにありついたが私はよっぽど発表が良かったのか質問が集中するという不幸。大体日本語でも質問の意味がとれないことがあるのに英語だとなおさら。又遠い位置からの質問は聞き取りにくく苦労した。

午後キャノンの人のレンタカーでフォートワースのストックヤードに行く。ここは昔家畜の交換所だった所をそのまま保存している。といっても完全を期待してはいけない。壊れかけた屋根付き歩道はどうか昔を忍ばせるが、店内は近代のおみやげものや。保安官もいないし、お訪ね者もないのでは西部劇にならない。もう少しうまく徹底的に古風にすればフレンチクオータぐらいになるだろう。近くにロデオ会場があったので、大会の日などは活気付くのだろう。交通公社のガイドに乗っていない所には行く必要はないようだ。

最近気が付いたことなのだがアメリカ人を理解するのに助けとなる一つの考え方があるので記しておく。アメリカ人を見る時アメリカ人は全員実業家だと思って見なくてはいけない。日本人は会社に雇われているという感じであるのに対し、アメリカ人は会社という場所で自分の事業を行っているのである。事業はどこでやっても自由であり、有利な場所があれば他に移るし、他の事業に転ずることも自由である。この様に全員が自分の利益を追求するところの実業家と見るとよい。「よくこういう実業家の集りで会社が構成できる」、と考えるのは、社会主義国の人々が資本主義社会を「利益追求の会社の集まりでよく社会が成り立つ」と考えるのと同じである。「全員が会社社長」これが自由の精神である。

このごろアメリカはイラン武器騒動で騒がしいようである。ここで気付いたのは、「アメリカは現時点で最もサエ、神通力を持っていると思われる人をトップにいただく」ということである。神通力を失ったと見るやすぐ首となる。常に最高のひらめきを持つと思われる人のみがひらめいている間だけトップに立つ。トップは常に輝いているというものである。日本では一時の神通力より長い間平均点の良さでトップを選んでいようである。アメリカはどんな人でも輝いた時だけトップになれる

る可能性を持っている社会である。チャンス社会？

7日 おわりに

昨年アメリカへ行って来たK大の先生が“やはりアメリカはすごいよ”という。最近の学会の集まりでIBMのF氏は日本は計算機社会でアメリカに十年後れていると豪語し、「アメリカはどうですか」としきりにアメリカ帰りの人に意見を聞く。「又アメリカか」、と少々不愉快になる。「アメリカから帰るとすぐアメリカかぶれでこれだ」、これが私の感想である。私だってアメリカに住んでいたことがあり、その時の印象では、日本の方が進んでいるくらいだと思ったものだ。日用雑貨はほとんど台湾、韓国製だし人々の衣類も粗末なものが多い。ただ計算機利用だけはアメリカの方が進んでいると思っていた。本屋では計算機で本を探してくれ、たし、電気、ガス会社でも登録は全て計算機であった。しかし計算機利用についていえば日本もこのところ急激に進み、最近筑波の本屋にも計算機が入った。この数年の間にほとんど追いついたと感じていた。

ただアメリカについていくつかの不可解な点を持っていたことも確かである。第1は最近日本の貿易黒字分がアメリカへ再投資されている点である。なぜ赤字国アメリカの国債をそんなに買わなければならないのかという点である。

第2は最近アメリカで神経コンピュータがはやり、又米国調査の必要が起こったことである。追いついたと思っていた研究分野で又どうしてアメリカの後を追わねばならぬのか不思議であった。

アメリカに来てやはり私は驚きをおくせない。私が追いついたと思ったのは数年前のアメリカのようで、アメリカは数年前にとどまっていたはいなかった。何と言ってもアメリカは豊かである。ダラスファートワース空港は世界最大の空港で発着数も数年のうちに世界一になると言われている。成田空港が南、北ウイングしか無いのに比べると比較にならない。空港内は歩いて移動できる距離ではなく、ターミナル間の移動には3系統の無人電車（10人位乗れる）が走っている。フリーウェイは広く頑丈で、一寸見れば日本の高速道路に比べ頑丈さが違うことがわかる。これはアメリカの資産である。ダラス市の構造も、ビル群に比べてフリーウェイが大きく、血管が太いということがわかる。そのフリーウェイを走る大型トラレーはとぎれることがない。高層ビルも日本のものに比べてよくデザインされている。建物は広い土地を利用し、空間の芸術を作り出す。日本は詰め込みの芸術を誇らねばならない。

会議の開かれたインフェーマートは中空の建物で、その中をガラス張りのエレベーターがすごい速さで上下する。まさにスターウォーズの世界である。大地は豊かである。広い土地を大きく区画し様々な作物を作っている。日本は狭い土地で付加価値を付けるためにビニールハウスを作り生態系をこわして農薬をばらまかねばならない。家は広い。肉は安い（うま味はない）。サンドイッチはパンの間に具が隠れているのではなく、パンが申し訳程度に付いているように見える。カルフォルニアのオレンジは世界一だ。日本に来ると独特の風味がなくなる。

これを見ていると私の持っていた疑問はすべてとける。アメリカがどんなに赤字でも金はアメリカに投資するしかない。最後はこの富める国にかなわない。今のアメリカは5000CC車で毎時55Kmで走っていて、日本は50CCのバイクで毎時60Kmで走っているように見える。日本はよくやっていると言えるが、トッ

9

プには立てそうに思えない。一寸無力感を感じつつアメリカかぶれとなって機中の人となった。

T h a n k y o u .